

年6月発行に掲載)の中で、故人は第一次大戦の前線で対峙するドイツ兵とフランス兵の「交歓」のひとつときと、沖繩戦のさなか阿嘉島での日米兵士の会食の例を挙げ、「戦争がつづく今こそ、戦争体験を改めて傳承し繼承しなければならぬわけだが、この営みは体験を歴史化し、思想化するためにこそ必要ではないだろうか。(中略)軍隊と

オルグの達人を追悼する

高橋武智が逝った。個人的には、都電魚籃坂下の停留場を思い出す。70年前、その近くに止まった車のフロントガラスに、朝鮮半島で戦さの火蓋が切られたことを報じる号外が置かれていたのを高橋が見つけたのだ。麻布中学3年生の私たちは学校帰りで、目黒行きの電車を待っているところだった。その同じ日か数日前のことか記憶が定かでないのだが、高橋は私に「重大な」秘密を打ち明けた。——実はぼく、共産党に入っているんだ。君も入らないか？

私の答えは、——ぼくも入れてくれ、だった。まるで、草野球のチームに誘われたみたいだ。その結果、「下山・三鷹事件の真相」という1冊10円のパンフレットを売らされ、週1回の「細胞会議」に出席することになった。朝鮮戦争の

いう『強制機構』のもとにありながら、何がこのような希有の機会を出現させたのだろうか？ このことの考察こそ、戦争の克服へ近づく一歩ではないだろうか？」と問いかけています。

ご冥福をお祈りします。

(ありま・やすひこ／本誌編集委員)

本野 義雄

激化と共に党内紛争も激化し、嫌気がさした私は1年後に脱党届を提出した。

10数年の歳月が流れ、高橋は立教大学教員に、私は民間放送TBSの記者になっていた。1967年末、私は高橋から人生2度目のオルグを受けた。「ベトナム戦争を拒否して脱走して来る米兵を援助するジャテックの運動に参加してほしい」。私と当時の妻の坂元は、全面的にその活動にのめり込むことになった。

当時、ジョンソンというスパイがジャテックに侵入、北海道とソ連・ヨーロッパという脱走兵の送り出しルートが利用出来なくなるという事態が発生していた。ベ平連から特使としてヨーロッパに派遣された高橋は、数カ月にもわたる苦闘の末、フランスの第2次大戦時の対独抵抗組織「ソリダ



麻布高校時代の高橋武智(手前左)と筆者(一番奥)

リテ」の協力を得ることに成功した。帰国後の彼は独特な方法でひそかに協力者を集めて変造旅券を作成、70年から71年にかけて2人の脱走兵を無事ヨーロッパに送り出した。

これは、ジャテックの出発点となった「空母イントレピッド号の4人」の脱出に匹敵する快挙だったが、事柄の性質上公にするわけには行かず、私たちは秘密を保持し続けた。71年夏、京都ベ平連の鶴見俊輔さんに高橋が報告した時のことは忘れ難い。高田馬場の喫茶店で席につくなり、高橋は——先生、全て成功しました、と言ったまま言葉が続かなくなった。見ると、彼は文

高橋武智さん 本野義雄さんの 傘寿を祝う会



字通りはらはらと大粒の涙を流していた。鶴見さんも私も、しばらく言葉もなく黙っていた。ありきたりの言辞でねぎらう気持ちには、なれなかったのだ。とにかく、彼がああ作戦に自らの人生を賭けていたことが、痛切に感じられた。

この作戦の経験が、彼の自信を強めたらしい。再び国外に出た彼は、「ソリダリテ」



筆者（左）と一緒に2人の傘寿を祝う会で（上）2人で一献（下）

の紹介を手がかりに当時武装勢力として強力だったPFLP（パレスチナ解放戦線）、ベルリンに集結していたアジア人のグループ、中東ベイルートを拠点とし、のちに「日本赤軍」を名乗ることになる日本人若者のグループと交流するようになる。74年、日本にいる私たちは、高橋のフランス国外追放のニュースを突然聞いて驚く。以後3年間、それまで多数の脱走兵を保護し越境させることに熱中した男は、皮肉にも自らが脱走兵と同様追われる立場に置かれることになった。

ベイルートに戻り、日本赤軍グループとは別行動をとることを告げ、以後ベルギーのブリュッセル、南スペインのヴァレンシア、イタリアのジェノヴァ、サルデーニャ

島とローマ、西ドイツのフライブルク、オランダのアムステルダム等を転々とした。その間、小田実さん、海老坂武さんが連絡をつけて会いに行ったが、高橋は「ヨーロッパでやる必要がある」と言って帰国の勧めをきっぱり拒否したという。

高橋はヨーロッパで何をしようとしていたのか。のちに本人に尋ねたことがある。「ベルリンの東南アジアグループを無事に故国に送り返したかった」というのが答えだった。

77年夏、スウェーデンのストックホルムで逮捕、「日本赤軍幹部」としてメディアに騒がれたが、空港でタラップを降りる時の高橋は胸を張って堂々とした態度を示した。公判結果は「偽造有印文書行使」で執行猶予付き6カ月。事実上の勝利判決と言えよう。

釈放後の高橋は、クロード・ランズマンの映画「シヨアー」の解説書などいくつかの翻訳、わだつみ会理事長、市民の意見30の会・東京共同代表、スロヴェニアのリュブリアナ大学講師などをつとめた。介護施設に入ってからフランス語、イタリア語、英語の新聞を読む習慣をやめなかった。享年85。合掌。

（もとの・よしお／本誌編集委員）